第１４回（通算２６７８回）例会記録　２０１５年（平成２７年）１１月４日（水）

- 司会進行／羽地　宏幸
- ロータリーソング／君が代・四つのテスト
- ビジター／田中　久光氏（浦添 RC）　他３名
- メークアップ／仁開一夫・池城貞光・玉城守雄
  小林昌道（計４名）

出　席　報　告

会員総数　39名　出席義務会員　38名
出席数　　22名　欠席数　　16名
出席率　57．89％（11月　通算出席率　57．89％）

本日のニコニコ

BOX　￥1,000（累計￥29,000）
コイン　￥3,435（累計￥44,513）　合計￥73,513

明日はバースデー、おかげ様で元気です。感謝。
宮良　榮子

会長挨拶：新　賢次

11 月に入りまして、さらに秋らしくなっておりますが、先週は例会で社会奉仕の一環でいこいの家に清掃用具の寄付を行いました。大変喜んで頂いたり、また新聞等で取り上げて頂いて、ロータリーの社会奉仕が目に見える形で出来たんじゃないかなと思っております。ロータリーの社会奉仕いろいろございますが、与那国への寄付も今日の理事会で決まりましたが、それも合わせてご理解とご協力をよろしくお願い致します。

国際大会、来年の話ですが、5 月の末に予定されております。旅行社から日程が来ておりますので、希望の方は事務局までお願いします。

先週文化の内容で、谷口さんという方の講演会がありました。その方は石垣市の観光アドバイザーをされていて、いろんな肩書がありますが、その 1 つに京都観光文化事業創造塾という、そういう活動もされています。世界中を見て回っている中で、京都もそうですが、この町何でこんなに人がいっぱいいるんだ？という所がいっぱいあると、そういうご紹介をしながら、文化というキーワードは大事だという話をされていました。そしてそういう町にするためにはブルーバード材をしっかり捉えたり、整理することが大事だと、要するに青い鳥、青い鳥は実は身近な所にあったという話なんですが、そういうものはなかなか捉えにくい面もあるが、それをしっかりと捉えて活用していくことが大事だという話をされていました。

今日はパスト会長の宮良榮子さんの「死生観」というテーマでお話をして頂きます。これも奥深い、大きなテーマであります。私が思うには 2 つに大きく分かれるんじゃないかと思います。1 つは今生きているという事は死に向かって時間が経過して行くわけですが、その死までの間の死を中心とした捉え方、基本的には死生観というのは死を通じての生の捉え方という事らしいんですが、今この世に生きている視点という事が 1 つ上げられるかと思います。もう 1 つはこの世に限らず死後もどういうふな考え方を持つか、そういう大きなテーマになるかと思います。この 2 つの面も含めて大変奥深いと思います。いずれにしてもこういうふうな大きな考え方の根底にある価値観というのは、やはり大事で、どういうふうに現在を捉えて、どういうふうに生きていくかというのを、文化というものにも決して無関係ではないと思っております。いろんな意味で今日はお宮良さんの卓話を楽しみにしております。

幹事報告:宮良　薫

第 5 回理事会を行いました。決定事項をお知らせ致します。与那国 21 号台風被害の支援について、義援金として会員から 5,000 円を徴収することに決定しました。ぜひ皆さんご協力をお願い致します。それから 11 月 6 日インターコンチネンタルホテルで蘇澳鎮との 20 周年記念の交流会の案内が来ております。会費 5,000 となります。7 日が姉妹都市との交流会の案内が来ています。みやひらホテルで 3,000 円の会費となっています。
それから 12 月 6 日・7 日に宮古 RC で米山奨学生が来島し、交流会をするという事で、案内が来ています。6 日にゴルフ、7 日に例会、バーベキューとなっていますので、都合のつく方は事務局までお願いします。

会員卓話:宮良　榮子氏

社会福祉法人希望ヶ丘　理事長

テーマ「私の死生観について」

今から 50 年前、私は沖縄本島より縁あって石垣島へと嫁いで参りました。先祖代々続く旧家の長男、五女一男の大家族の嫁として務めさせて頂きました。

当時を振り返りますと、辛いことも沢山ありましたが、義理の父とは 7 年間、義理の母とは 25 年間、寝食を共にし、両親の深い愛情のお蔭で私は四人の子育てを夫婦共働きでこなすことができました。義母は、10 年間は軽度の認知から始まり、徘徊や昼夜逆転の生活、私たち夫婦の間に義母を寝かせて夜を過ごしたものです。子供達も交替で義母の入浴や排泄のお手伝いをしてくれました。当時は、介護保険という制度もなく、姑、舅の世話は長男の嫁の仕事であることがあたりまえの世の中でした。介護施設へ入れる家族は親不孝者と言われるような風潮でした。私の誇りは、両親を自宅で家族や親せきに見守られ天国に送る事ができたという事です。

私が社会福祉法人希望ヶ丘を設立した想いは、数年間寝たきりの義母と過ごし、介護させてもらった達成感と子供達も両親のお蔭で、お年寄りにやさしい子供に成長させてもらいました。地域の皆さんも私と同じ思いをしている方がいるのではないか、施設に入所してもらい安心して子育てができる環境も必要なのではないか。私は、その経験だけを頼りに思い切った事を考えました。「安心してお年寄りを預けられる老人ホームをつくろう」

厚生省が打ち出した計画と合致したのが、平成 8 年 9 月沖縄県初ケアハウス「ばすきなよお」が誕生しました。ネーミングも私達お年寄りをわすれないでね、という意味を込めました。私はこのとおり福祉の専門家でもなく、知識人でもありません。ただ自分の経験を生かしたいという強い意志と情熱がありました。そして、地域の皆さんに支えられ、社会福祉法人希望ヶ丘は今年 20 周年を迎えました。20 年の間には、数百人の方々を天国にお送りさせて頂きました。当時、お元気だった方々も今では車イスがなければ生活ができない状況になり、食事がとれない方は経管栄養に頼らざるを得ない状況です。

私は、毎日お年寄りと共に生活しているにもかかわらず、自分の老後とか死に対して口にしてもまったく他人事のようで実感がありません。人間っていくつになっても健康の間は、自分は年寄りではないと思いがちですね。身体機能が衰えてはじめて年を感じるのでしょう。いずれにしても私にも死は必ず訪れますので、自分らしく自然体で死を迎える「延命処置はノー」と子どもたちに話していますので、私の場合は、安心して「後のことは小林住職が導いてくださるものと信じています。」

皆さんは、まだまだ若いので、自分たちの親の最期を看取らなくてはいけませんから、参考になると思いますので、ある事例をお話します。最近読んだ本の中で、「自分らしく死をむかえるということ」病気であれば終末期という事になりますが、現実には、自分はいつまでも元気で寝たきりになんかならないと考えます。終末期や自分の死は他人事なんです。穏やかな最期を迎えたいと願っていても、その意思を子供達に伝えないばかりに、延命措置の末、経管栄養を余儀なくされます。

かかりつけ医がいないと警察が来るというケースもあります。自宅で穏かな大往生を遂げたのに、かかりつけ医を決めていなかった為、突然、自宅で亡くなった時、死亡診断書が書けない場合は、死体検案書になり、他殺の可能性が少しでもあれば、警察に通報する義務が発生します。

こんなお話もあります。「欧米に寝たきり老人はいない」自分で決める人生最後の医療という中から、「死ぬから食べない」と書いてあるアメリカの内科の教科書の紹介があります。日本の医療は延命重視であり、一分一秒でも命を永らえさせることが使命だと思っている医師が少なくないそうです。そのため家族が「食べるだけ、飲めるだけでいいので、点滴も経管栄養もしないで自然に看取ってください」と言うと、「餓死させる気か」と怒られたり、退院を迫られたりすることがあるそうです。

穏やかな最期を迎えたい、これは誰もが基本的

な欲求ですが、日本の特別養護老人ホームは、個人の意思が尊重された、自然な人生の終末期を迎える施設として、その目的を完結できるシステムではありません。自分の親に何かあったとき、その家族はさまよいます。どこへ行けば安心して両親を看取ってもらえるのか。問題は山積みされるばかりです。そして医療現場でも介護現場でも当事者の十分な知識と理解力が問われる問題が日常的に起こっていることは確かです。

当施設でも数年前、ある入居者の死をめぐって、家族から訴えられるという事がありました。2 年に及ぶ、長い裁判は施設側の勝訴という形で結審しましたが、その時の悲壮感は口では言い表せない程、辛く苦しいものでした。特に当時勤務していた看護師や介護職の名誉の為にも弁護士を通して、最後まで真実を伝えるという作業を強いられました。一番悲しんだのは天国から見ていた入居者 M さんだったと今でも思います。

私は、両親を自宅で看取ることができたと言いましたが、今から二十数年前は、どこの家庭でも自然に看取ることができたと思います。しかし現実には、リビング・ウイルを書いても生かされないケースがあるようです。リビング・ウイルとは、自分らしく死をむかえるという指示書で理解してください。（遺言状のようなもの）

「90 歳の女性が自宅で長男夫婦と暮らしていました。ある日家で転倒し、左腕を骨折しました。その 3 日後には布団から起き上がることができなくなり、意識もなくなりました。驚いた家族が救急車で公立病院に連れていったところ、脳梗塞を起こしていました。翌日、民間の急性期病院に転院し、医師から「意識はもどらないと思いますが、もしかしたら、数ヶ月後に目覚めて手を動かしたり、話ができるかもしれません。」と言われました。本人は、80 歳の時から「どんなことがありましても決して延命措置はしないで、一日も早く楽にしてください」とリビング・ウイルを残しており、毎年書き換えていました。二男、孫たちは本人の望みを叶えてあげたかったので、転院翌日、本人のリビング・ウイルを医師に見せました。しかし医師は「病院ですから」と言って取り合いませんでした。」

（皆さんなら、どのようにかんがえますか）

4つの考え方があります。(同居する長男の考え、次男、孫の考え、本人の意思、医師の考え）

ここで大事なのは、家族が同じ考えを持つということ。これまで、幾多の苦難に耐え、それを乗り越えてこられた方々に最後の看取りを自然体でと願う毎日です。

石垣市が目指すものとして、日本一幸せあふれる町「石垣市」というスローガンのもとすべての高齢者が健康で生き生きと共に支え合い（ユイマール）安心して暮らせるまちいしがきに住む私たちは、健康寿命を推進し、寝たきりにならない運動をしていかなければならないのです。それは石垣市を担う子供たちへのエールになります。

～例会風景～

国際ロータリー第２５８０地区

石垣ロータリークラブ週報

＜今月のロータリーレート　＄1=120円＞　Weekly Report No. 2572

国際ロータリー・テーマ

世界へのプレゼントになろう

K. R. ラビ・ラビンドラン

2015－16年度 会長テーマ 「奉仕・天資と文化」

会長	新 賢次	副会長	前木 繁孝
直前会長	上原 秀政	幹事	宮良 薫
副幹事	前原 博一	SAA・出席	羽地 宏幸
情報・会報	名渡山秋彦		

創立記念日　1962年3月12日　(55周年)

2015年（平成27年）11月11日（水）　第18回　例会（通算2679回）

＜今週の職場：APA ホテル石垣島（大浜　勇人会員）＞

APA ホテル石垣島を経営しております大浜勇人でございます。笑顔を大切にお客様が安全で、安心してご宿泊いただけるホテルを目指し、職員一同働いており、これからも石垣島の観光業の担い手のホテルとして、頑張っていきます。

例会日　水曜日　12:30～13:30
例会場　ホテル日航八重山（0980）83－3311
事務局　〒907-0013 石垣市浜崎町 1-1-4

TEL/FAX（0980）83－2917
URL　http://ishigaki-rotary.jimdo.com
E-mail　ishirotary@ninus.ocn.ne.jp